

半島一奇抄

泉鏡花作

全一章

「やあ、しばらく。」

記者が掛けた聲に、思はず力が入つて、運轉手はたと自動車留めた。實は相乗して席を並べた、修善寺の旅館の主人の談話を、ふと遮つた調子はずんで高かつたゝめである。

「いや、構はず 何うぞ。」

振り向いた運轉手に、記者が一寸てれながら言つたので、自動車は其のまゝ一軌りして進んだ。

沼津に向つて、浦々の春遅き景色を馳らせる、土地の人は（みつと）と云ふが三津の浦を、いま浪打際と殆どすれ／＼に通る處であつた。しかし、これは廻り路である。

小暇を得て、修善寺に遊んだ、――新聞記者

は、暮春の雨に、三日ばかり降込められた、宿の出
入りも番傘で、たゞ垂籠めがちだつた本意なさに、
日限の歸路を、折から快晴した浦づたひ。――
「當修善寺から、口野濱、多此の浦、江の浦、獅子
濱、馬込崎と、駿河灣を千本の松原へ向つて、富士
御遊覽で、それが自動車と來た日には、どんな、大
金持だつて、何、あなた、それまでの贅
澤でございますよ。」と番頭の膝を敲いたのには、
少分の茶代を出したばかりの記者は、少からず怯か
された。が、乗りかゝつた船で、一臺大に驕つた。
――主人が沼津の町へ私用がある。――其
處で同車で乗出した。

大仁の町を過ぎて、三福、田京、守木、宗光寺畷、
南條――と云へば北條の話が出た。
四日町を抜けて、それから小四郎の江間、長塚を横
ぎつて、口野、すなはち海岸へ出るのが順路であつ
た。

うの花にはまだ早い、山田小田の紫雲英、残の菜
の花、並木の隨處に相觸れては、狩野川が線子を張

つて青く流れた。雲雀は石山に高く囀つて、鼓草の綿がタイヤの煽に散つた。四日町は、新しい感じがする。両側をきれいな細流が走つて、背戸、籬の日向に、若木の藤が、結綿の切をうつむけたやうに優しく咲き、屋根に蔭つくる樹の下に、山吹が浅く水に笑ふ

家毎に申合せたやうである。

記者がうつかり見惚れた時、主人が片膝を引いて、前へ屈んで、「辰さん——道普請がある筈だが前途は大丈夫だらうかね。」「さあ」「さあぢやないよ、それだと自動車は通らないぜ。」

「尤も半月の上になりますから。」と運轉手は一筋路を山の根へ見越して、やゝ反つた。「半月の上だつて落着いて居る處ぢやないぜ。いや、もう少しと後路で氣をつけようと、修善寺を出る時から思つて居ながら、お客様と話で夢中だつた。」

「——何、海岸まはりは出来ないのですかね。」「いゝえ、南條まで戻つて、三津へ出れば仔細ありませんがな、氣の着かないことをした。」

「辰さん、一度聞いた方がいゝぜ。」「は、然ういたしませう。」「恐ろしく丁寧に成つたな

あ。「と主人は、目鼻をくしゃ／＼とさせて苦笑して、茶の中折帽を被り直した。「はやい方が可い、聞くのに――」けれども山吹と藤のほか、村路の午静に、渠等を差覗く鳥の影もなかつた。そのかはり、町の出はづれを國道へついて左へ折曲らうとする角家の小店の前に、雑貨らしい箱車を置いて休んで居た、半纏着の若い男は、軒の藤を潜りながら、向うから聲を掛けた。「何處へ行くだ、辰さん。長塚の工事は城を築くやうな騒ぎだぞ。」「まだ通れないのか、然うかなあ。」

店の女房も立つて出た。「來月半ばまで掛るんだとよう。」「いや、難有う。さあ引返した。」

苟も温泉場に於て、お客を預る自動車屋もあるものが、道路の交通、是非善悪を知らんと云ふのは、まことに以て不心得。「と、少々芝居がかりに成る時、記者は、其の店で煙草を買つた。

砂を擧げて南條に引返し、狩野川を横切つた。古奈、長岡――長岡を出た山路には、遅櫻の牡丹咲が薄紫に咲いて居た。長瀬を通つて、三津の濱へ出たのである。

富士が浮いた。

よく、言ふ事で――

佐渡ヶ島には、ぐるりと周囲に欄干があるか、と聞いて、
其の島人に叱られた話がある。

が、巖山の巉崖を切つて通した、榮螺の角に似た刻々の麓の徑と、浪打際との間に、築繞らした石の柵は、土手と言ふよりも唯低い欄干に過ぎない。

「お宅の庭の流にかゝつた、橋廊下の欄干より低いくらゐで、
すぐ、富士山の裾を引いた波なんですか。よく風で打つけませんね。」

「大丈夫でございますよ。後方が長濱、あれが辨天島。――自動車は後眺望がよく利きません、むかうに山が一ツ浮いて居ませう。淡島です。あの島々と、上の鷺頭山に包まれて、此の海岸は、これから先、小海、重寺、口野などと成りますと、御覽の通り平穩な駿河灣が、山の根を奥へ奥へと深く入込んで居りますから、風波の恐怖と言つては殆どありません。――そのかはり、山の麓の隅の隅が、山扁の隅と云つた僻地で
以前は、里からでは漸く木樵が通ひますくらゐ、まるで人跡絶えた

と云つた交通の不便な處でございましてな、地圖を一寸御覽なすつても分りますが、絶所、悪路の記號と云ふ、あの。八チパチツとした線香花火が、ついで頭の上の山々を飛び廻つて居るのですから。

手前、幼少の頃など、學校を怠けて、船で淡島へ渡つて、鳥居前、あの頂邊で辨當を食べるなぞはお茶の子だつたものですが、さて、此の三津、重寺、口野一帶と來ますと、行軍の扮装でもむづかしい冒險だとしたものでしてな。――沖から此の邊の浦を一目に眺めますと、辨天島に尾を曳いて、二里三里に餘る大龍が一條、白浪の鱗、青い巖の膚を横へたやうに見える、驚頭山を冠にして、多此の、就中入窪んだあたりは、腕を張つて龍が、爪に珠を掴んだ形だと言ひます。まつたく見えますのでな。」

「乗つてるんですね！ 其の上にいま何だか足が擦つたいやうですね。」

記者はシイツに座をずらした。

「いえ、決して、其の驚かし申すものではありません。それですから、辨天島の端なり、其の

淡島の峯から、恸う此の巖山を視めますと、本で見ました、仙境、魔界と言つた工合で
んなか、拍子で、此の崖に袖の長い女でも居ようものなら、龍宮から買ものに顯はれたかと思つたもので。――前途の獅子濱、江の浦までは、大分前に通じましたが、口野から此方

自動車は、既に海に張出した石の欄干を、幾處か、折曲り折曲りして通つて居た。

「三津を長岡へ通じましたのは、ほんの近年のことで、それでも十二三年に成りませうか。――可笑な話がございますよ。」

主人は、パツ／＼と二つばかり、巻蓑を深く吸つて、

「此の石の棧道が、はじめて掛りました。まづ、開通式と云つた日に、此處の村長――唯今でも存命で居ります。――年を取つたのが、大勢と、村口に客の歓迎に出て居りました。縣知事の一行が、眞先に乗込んで見えた

あなた、其の馬車　――

自動車の警笛に、繰返して、

「馬車が、眞正面に、此の棧道一杯に成つて大目に入つたと思召せ。村長の爺様が、突然七八歳の小兒のやうな奇聲を上げて、（やあれ、見やれ、鼠が車を曳いて來た。）　――　とんとお話さ、話のやうでございましてな。」

「やあ、しばらく！」
記者が、思はず聲を掛けたのは此の時であつた

――
肩も胸も寄せながら、
「浪打際の山の麓を、向うから寄る馬車を見て
――　鼠が車を曳いて來た　――　成程、しかし、
其は事實ですか。」

記者が何故か意氣込んだのを、主人は事もなげに軽く受けた。

「は、は、は、一つばなし。ですが事實に

も何にも——手前も隣郡のお附合、

これで徽章などを付けて立合ひました。爺様の慌てたのを、現に其處に居て、存じて居ります。が、別に不思議はありません。申したほどの嶮道で、駕籠は無理にも如何でせうかな——爾時七十に近い村長が、生れてから、いまだ嘗て馬と云ふものの村へ入つたのを見たことがなかつたのでございますよ。」

「馬を見て鼠 何だか故事がありさ

うで變ですが——はあ、然うすると、同時に、

鼠が馬に見えないとも限りませんか知ら。」

「は？」

「鼠が馬に見えるかも知れませんが、何うでせ

う。」

「いや、おつしやると。」

主人は少し傾いたが、

「唯、それだけの話で、深く考へた事

もありませんが、成程、一寸似て居るかも知れませ
ん、尤も黒い奴ですがな。」

「御主人　ー　差當りだけでも、然う肯定をなさるんなら、私が是非話したい事があるのです。現在、然も此の土地で、私が實見した事實ですがね。餘り突拍子がないやうですから　ー　實はまだ、誰にも饒舌りません。　ー　近い處が以前からお宅をひみきの里見、中戸川さん、近頃では芥川さん繪の方だと横山、安田氏などですか。私も知合ではありませんが、たとへば、其の人たちにも話をしません。芥川さんなどは、話上手で、聞上手で、瘦せてゐても懷中が廣いから、嬉しさうに聞いてはくれるでせうが、苦笑ものだらうと思ふから、それにさへ遠慮をして居るんですがね。　ー　御主人。」

「はゝあ、はあ　　で、それは。」

「いや、そんなに大した事ではありません。實は昨年、丁ど今頃　　もう七八日あとでした。」

矢張りお宅でお世話に成つて、其の歸途がけ、大仁からの電車でしたよ。此の月二十日の修善寺の、あの大師講の時ですがね、　ー　お宅の傍の虎溪橋正面の寺の石段の眞中へ　ー　夥多い

参詣だから、上下の仕切がつきませう。」

「如何にも。」

「あれを青竹一本で渡したんですが、丈と言ひ、其の見事さ、かこみの太さと言つちやあない。――俗に、豆狸は竹の子の根に籠るの、くだ狐は竹筒の中で持運ぶのと言ふんですが、燈心で釣をするやうな、嘘ばかり。出も、入りも出来るものか、と思つて居ましたけれども、あの太さなら、犬の子はすばんと納まる。修善寺は竹が名物だらうか、然ういへば、随分立派なのがすく／＼ある。路ばたでも竹の子のづらりと明るく行列をした處を見掛けるが、ふんだんらしい、誰も折りさうな様子も見えない。若竹や――何とか云ふ句で宗匠を驚したと按摩にまで聞かされた――確に竹の樂土だと思ひました。ですがね、此はお宅の風呂番が説破しました。何、竹にして賣る方がお錢に成るか、竹の子は掘らないのだと少幻滅を感じました。」

主人は苦笑した。

「しかしー 修善寺で使った、あのくらゐなのは、まったく見た事はない、と田京あたりだつたでせう。温泉で、見知越で、乗合はした男とー いや、その男も實は、はじめて見たなどと話して居ると、向う側に、革の手鞆と、書もつらしい、袱紗包を上置いて、腰を掛けて居た、土耳古形の毛帽子を被つた、棗色の面長で、髯の白い、黒の紋織の被布で、人がらのいゝ、茶か花の 宗匠といつた風のー

半ば聞いて頷いた。こゝで主人の云つたのは、それは浮島禪師、また桃園居士などと呼ばれる、三島沼津を掛けた高持の隠居で。何不足のない身の上とて、諸藝に携はり、風雅を樂む、就中、好んで心學一派の如き通俗なる佛教を講じて、遍く近國を教導する知識ださうである。が、内々で、浮島をかんで讀むお爺さんー 浮島爺さんと言ふ渾名のあることも、また主人が附加へた。

「其の居士が、いや、もしと、莞爾々々、と聲を掛けて、あれは珍らしい、其の譯ぢや、茅野と申して、此處から宇佐美の方へ三里も山奥の谷間の村が竹の名所でありましてな、其處の講中が大自慢で、毎年々々、南無大師遍照金剛でかつぎ出して寄進しますのぢやと話してくれました。それから近づきに成つて、やがて、富士の白雪あさ日とけて、とけて流れて三島へ落ちて、と云ふことに、成つたので。」

自動車が警笛を。

主人は眉の根に、放と深く皺を寄せて、鼻で撓めるやうに顔を向けた。

「はてね。」

「いや、とけておちたには違ひはありませんがね——三島女郎衆の化粧の水などと云ふ、はじめから、そんな腥い話の出よう筈はありません。さきの御仁體でも知れます。もうづつと精進で。」

さて、あれほどの竹の、竹の子はどんなだらう。
食べたら古今の珍味だらう、と云ふやうな話から、
修善寺の奥の院の山の獨活、これは字も似たり、獨
鈷うどと稱へて形も似て居る、仙家の美膳、秋は又
自然薯、いづれも今時の若がへり法などは大俗で及
びも着かぬ。早い話が牡丹の花片のひたしもの、芍
薬の酢味噌あへ。――はあ／＼と、私が感に入
つて驚くのを、をかしがつて、何、牡丹のひたしも
のと言つた處で、一輪づゝ枝を折る殺風景には及ば
ない、いけ花の散つたのを集めても結構よろしい。
しかし、鰲澤といへば、まことに蘭飯と稱して、蘭
の花をたき込んだ飯がある、禪家の鳳臍、これは、
不老の薬と申しても可い。――御主人――
これなら無事でせう。先づ此の邊までは芥川さんに
話しても、白い頬を窪まし、口許に手を當てて頷い
て居ませうがね、
あとが少しむづかしい。

――

私は其の時は、はじめから、もと三島へ下りて、
一汽車だけ、いつも電車ではかり見て通る、あの、
何とも言へない路傍の綺麗な流を、もつとづつと奥

まで見たいと思つて居ましたから。」

「すなはち、化粧の水ですな。」

「お待ちなさい。そんな流の末ぢやあ決してない。朝日でとけた白雪を、其のまゝ見たかつたのに相違ないのです。三島で下りると言ふと、居士が一所に参つて、三島の水案内をしようと言ひます。辭退をしましたが、いや、是非ひとつ、で、私は恐縮をいたしました。實は餘り恐縮をしなくても可さうでしたよ。御隠居様、御機嫌よう、と乗合はせた近まはりの人らしいのが、お婆さんも、娘も、何處かの商人らしいのも、三人まで、小さな荷ですが一つ一つ手傳ひましてね、なか／＼どうして禮拜されません。が、此の人たちの前、些と三島で下りるのが擧つたかつたらしい。いゝかこついで、私は風流の道づれにされた次第だ。停車場前の茶店も馴染と見え、其處で、私のも一所に荷を預けて、それから出て掛けたんですが、これがつとそれ、昔の東海道、箱根のお開所を成りたけ早めに越して、臼ころばしから向う阪をさがりに、見ると、河原前の橋

を掛けて此の三島の兩側に、ちら／＼灯が見えよう
と言ふのでと　　何處か、壁張りの古い繪ほど
に俤の見える、眞晝で、ひっそりした町を指さゝれ
たあたりから、兩側の家の、恚う冷い濕っぽい裡から、
暗い白粉だの、赤い油だのが、何となく匂つて来る
と　　昔を偲ぶ、　　いや、宿のなごりと
は申す條、通り筋に、あらはな賣色のかゝる體裁は
大に風俗を害しますわい、と言ふ。其の右斜な二階
の廊下に、欄干に白い手を掛けて立つて居た、楯か
しい女があります。切組の板で半身です、が、少し
伸上るやうにしたから、帯腰がすらりと見える。

水淺葱の手絡で圓鬘に艶々と絶つたのが、
恚う、三島の宿を通りかゝる私たちの上から覗くや
うに少し乗出したと思ふと、　　えへん！

居士が大な一咳をしました。女がひよいと顔
をそらして廂へうつむくと、猫が隣りから屋根つた
ひに、傳ふのです。何うも割合に暑うござすと、居士
は土耳其帽を取つて、きちんと疊んだ手拭で、汗を
拭きましたつけ。

主人も何となく中折帽の工合を直して、而してク
ス／＼と笑つた。

「御主人の前で、何も地理を説く要はない。――
御修繕中でありました。神社へ参詣をして、表門
の森を抜けて、一度一寸田畝道を抜けましたかね、
穀藏、もの置藏などの並んだ處を通つて、昔の屋敷
町と云つたのへ入つて、それから榎の宮八幡宮――
此の境内が、殆ど水源と申して宜しい、白雪のと
けて湧く處、と居士が言ひます。
大楠、老櫟、森々と暗く聳えて、瑠璃、瑪瑙の盤、
また薬研が幾つも並んだやうに、蟠つた樹の根の
脈々、巖の底、青い小石一つの、其の下からも、む
く／＼とも噴出さず、ちろ／＼と銀の鈴の
舞ふやうに湧いて居ます。不躑ですが、御手洗で清
めた指で觸つて見ました。冷い事、氷のやうです。
湧いて響くのが一粒づつ、掌に玉を拾ふさうに思は
れましたよ。」

あとへ引返して、すぐ宮前の通から、小橋を一つ、
其處も水が走つて居る、門ばかり、家は形もない
―― 潜門を押し入ると―― 植木屋らしい
のが三四人、土をほつて、運んで居ました。」

—— 別荘の賣りものを、料理屋が建直すのだ
つたさうである。

「築山のあとでせう。葉ばかりの菖蒲は、根を崩され、霧島が、ちら／＼と鍬の下に見えます。お、御隠居様、大旦那、と植木屋は一齊に禮をする。一寸邪魔をしますよ。で、折れかゝった板橋を跨いで、さつと銀をよないだ一幅の流の汀へ出ました。川と云ふより色紙形の湖です。一等、水の綺麗な場所だな。居士が言ひましたよ。耕地が一面に向うへ展けて、正面に乙女峠が見渡される。此の荒庭のすぐ水の上が、いま詣でた榎の宮裏で、暗いほどな茂りです。水は其の陰から透通る霞のやうに流れて、幅十間ばかり、水筋を軽くすら／＼と引いて行きます。もし、ふつくりとした浪が二ツ處立つたら、それがすぐに美人の乳房に見えませう。宮の森を黒髪にして、丁ど水脈の血に揺らぐのが眞白な胸に當るんですね、裳は裾野をかけて、此の水面に、うつくしく雪に捌けませう。——

椿が一輪、冷くて、燃えるやうなのが、すつと浮

いて来ると、……浮藻　――藻がまた綺麗な
のです。二丈三丈、萌黄色に長く靡いて、房々と重
つて、其の茂つたのが底まで澄んで、透過つて、軟
な細い葉に、ばら／＼と露を丸く吸つたのが水の中
に映るのですが　――浮いて通る其の緋色の山椿
が……藻のそよぐのに引寄せられて、水の上を、
少し斜に流れて来て、藻の上へすつと留まつて、熟
と成る。……浅瀬も此の時は、淵のやうに寂然
とする。また一つ流れて来ます。今度は前の椿が、
一寸傾いて招くやうに見えて、其が寄るのを、いま
居た藻の上に留めて、先のは漾つて、別れて行く。

また一輪浮いて来ます。　――何だか、天の川
を誘ひ合つて、天女の簪が泳ぐやうで、私は恍惚、
いや茫然としたのですよ。これは風情ぢや……
と居士も、巾着じめの煙草入の口を解いて、葡萄に
栗鼠を高彫した銀煙管で、悠暢としてうまさうに喫
んで居ました。

目の前へ　――水が、向う岸から兩岐に尖つて
切れて、一幅裾擴がりに、風に半幅を絞つた形に、

薄い水脚が立つた、と思ふと、眞黒な面がぬいと出ました。あ、此の幽艶清雅な境へ、凄まじい闖入者！と見ると、ぬめりとした長い面が、凡そ一尺ばかり、左右へ、いぶりを振つて、ひゆつ／＼と水を捌いて、眞横に私たちの方へ切つて来る。鰯か、鯉か、鮒か、鯰か、と思ふのが、二人とも立つて不意に顔を見合はせた目に、歴々と映ると思ふ、其の際もなかつた。

――馬ぢや……

と居士が、太く怯えた聲で喚いた。私もぎよつとして後へ退つた。

いや、嘘のやうな話です――遙に蘆の湖を泳ぐ馬が、こゝへ映つたと思つたとしてもよし、軍書、合戦記の昔を其のまゝ幻に視たとしても、どつち道ゆめみ夢見たやうに、瞬間、馬だと思つたのは事實です。

やあい、其處へ遁げたい

泳いでらい、

畜生々々。わんぱくが、四五人ばら／＼と、畠の縁へ兩方から、向う岸へ立ちました。

ー
鼠ぢや

鼠ぢや、畜生めが
ー

と居士がはじめて言つたのです。ばしやん／＼、
氷柱のやうに水が匆ねる、小兒たちは続け状に石を
打つた。此の騒ぎに、植木屋も三人ばかり、づつと
来て、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ、泳ぐ
と感に堪
へて見て居る。

見事なものです。實際巧に泳ぐ。が、凡そ中流の
處を乗切れない。向つて前へ礫が落ちると、すつと
引く。横へ飛ぶと、かはして避ける。避けつゝ渡る
のですから間がありました。はじめは首だけ浮いた
のですが、礫を避けるはずみに飛んで浮くのが見え
た時は可恐い兀斑の大鼠で。畜生め、若い時は、一
手、手裏剣も心得たぞ ー とニヤ／＼と笑ひな
がら、居士が石を取つて狙つたんです。小兒の手か
らは、やゝ着弾距離を脱して、八方此方へ近づいた
處を、居士が三度續けて打つた。二度とも沈んで、
鼠の形が水面から見えなくなつては、二度とも、む
く／＼と浮いて出て、澄まして又水を切りましたが
ね、あたつた！
と思ふ三度の時には、もう沈ん

だ切、それ切まるで見えなく成る。

水は清く流れました、が、風が少し出ましてね、
何となくざつと鳴ると、まさか、其處へ

― 水を潜つて逃げたのではありますまいが、
宮裏の森の下の眞暗な中に落重つた山椿の花が、ざ
わ／＼と動いて、あとから／＼、亂れて、散つて、
浮いて来る。大木の椿も、森の中に、い

ま燃ゆるやうに影を分けて、其の友だちを覗いたや
うです。― これは又見ものに成つた―

見るうちに、列を織つて、幾つともなく椿の花が流
れて行く。一町ばかり下に、其處に第一

の水車が見えます。四五間さきに水車、また第三の
水車、第四、第五と續いたのが見えます。流の折曲
る處に、第六のが半輪の月形に覗いて居ました。

― 見る内に、其の第一の水車の齒へ、一輪紅
椿が引掛つた― 續いて三ツ四ツ、くるりと廻
るうちに七ツ十と 忽ちくる／＼と緋色に

累ると、直ぐ次の、又次の車へもおなじやうに引擲
つて、廻りながら累るのが、流れる水脚のまゝなん
ですから、早いも遅いも考へる間はありません。揃

つて眞紅な雪が降積るかと思えて、それが一つ一つ、舞ひながら、ちら／＼と水晶を溶いた水に揺れます。呆氣に取られて、あゝ、綺麗だ、綺麗だ、と思ふうちに、水玉を投げて、紅の飛沫を揚げると、何うでせう、引いて居る川添の家毎の軒より高く、とさかの燃えるやうに、水柱を、颯と揃つて擧げました。

居士が、けた／＼ましく二つ三つ足踏をして、胸を揺つて、（火事ぢや、宿ぢや、おたにの方ぢや　ー　御免。）とひよこ／＼と日和下駄で驅出しざまに、門を飛び出ようとして、振返つて、（やあ、皆も来てくれ。）尋常ごとであります。植木屋徒も誘はれて、残らずどや／＼と驅けて出る。私はとぼんとして、一人、離島に残された氣がしたんです。こんな島には、あの怪い大鼠も棲まうと思ふ、何となく、氣を打つて、みまはしますとね。」

「はあ　ー　」

「ものゝ三間とは離れません。宮裏に、此の地境

らしい、水が窪み入った淀みに、朽ちた欄干ぐるみ、池の橋の一部が落込んで、流とすれ／＼に見えて、上へ落椿が溜りました。うつろに、もの寂しく唯一人で、いま其を見た時、花がむく／＼と動くと、眞黒な面を出した、――尖った馬です。」

「や。」

「鼠です。大鼠がずぶ／＼と水を刎ねて、鯨がギリシヤ製の尖兜を頂いた如く――のそりと立つて、黄色い目で、此の方をじろりと。」

「聲は、カーンと響いて、眞暗に成った。――

隧道を抜けるのである。」

「思はず畜生！ と言つたが夢中で遁げました。」

水車のあたりは、何にもありません、流がせんせんと響くばかり静まり返つたものです。ですが――

お谷さん――最う分つたでせう。欄干に凭れて東海道を覗いた三島宿の代表者。此が生得繪を見ても毛穴が立つほど鼠が嫌なんだと言ひ

ます。こゝに於て、居士が、騎士に鬢髪を染めた次第です。宿の其の二階家の前は、一杯の人ばかりで

欄干の二階の雨戸も、軒の大戸も、ぴつたりと閉まつて居ました。口々に雑談をするのを聞くと、お谷さんが、朝化粧の上に、七つ道具で今しがた、湯へ行かうと、門の小橋を跨ぎかけて、あつと言つた、赤い鼠！ と、あ、と聲を内へ引いて遁込んで、けたゝましい足音で、階子壇を駆上ると、あれえ／＼と二階を飛廻つて欄干へ出た。赤い鼠が其處まで追廻したものらしい。キヤツと其處で悲鳴を立てると、女は、宙へ、飛上つた。柔の仙人を倒だ、其の白さつたら、と消防夫らしい若い奴は怪しからん事を。――其處へ、両手で空を掴んで煙を掻分けるやうに、火事ぢや、と驅つけた居士が、（やあ、お谷、軒をそれ火が嘗めるわ、えゝ何をしとる）と太鼓ぬけに上つて、二階へ出て、縁に倒れたのを、――その時やつと女中も手傳つて、抱込んだと言ひます。此ぢや戸をしめずには居られませんまい。」

「驚きました、實に驚きましたな

三島

一言言ひながら、海道一の、したゝかな鼠です

な。

自動車は隧道へ續けて入った。

「國境を越えましたよ。」
と主人が言った。

「時に、お話につれて申すやうですけども、それを伺つては何うやら黙つて居られないやうな氣がしますので。さあ、然も丁ど、

昨年、其の頃です。江の浦口野の入海へ漾つた、漂流物がありました。一頃はえらい騒ぎでございましたよ。濱方で拾つた。其が――困りましたな――此もお話の中になりましたが、大な青竹の三尺餘のずんどです。

一體恚うした僻地で、此が源氏の畠でなければ、さしづめ平家の落人が隠れようと言ふ處なんで、毎度怪い事を聞きます。此の道が開けません、つい以前前の事ですが。お待ち下さい

此の浦一圓は鰯の漁場で、秋十月の半ばからは袋網といふのを曳きます、大漁と成ると、大袈裟ではありません、海岸三里四里の間、づつと靜浦の町中まで、濱一面に鰯を乾します。畝も畑もあつたものぢ

やありません、廂下から土間の竈のまはりまで、鰯を詰込んで、何うかすると、此の石柵の上まで敷詰める。――處が、大漁と言ふうちにも、其の時は、また夥多く鰯があがりました。獅子濱在の、良介に次吉と云ふ親子が、氣を替へて、烏賊釣に沖へ出ました。暗夜の晩で。――しかし一尾もかゝりません。思切つて船を漕戻したのが子の刻過ぎで、浦近く、あれ、あれです、あの赤島の此方まで来ると、却つて朦朧と薄あかりに月がさします。びしやり／＼、ばちや／＼と、舷で黒いものが纏れて泳ぐ。」

「鼠。」

「いや、お待ち下さい、人間で。親子

は顔を見合はせたさうですが、助け上げると、ぐしよ濡れの坊主です。――仔細を聞いても、何にも言はない。雫の垂る細い手で、唯、陸を指して、上げてくれ、と言ふのでしてな。」

「可厭だなあ。」

「上げるために助けたのだから、これに異議はありません。濱は、それ、爾時大漁で、鰯の上を蹈んで通る。坊主が、これを皆食ふか、と云った。坊主だけに鰯を食ふかと聞くもいゝが、ぬかし方が頭横柄で。血の氣の多い漁師です、癢に觸つたから、當り前よ、と若いのが言ふと、（人間の食ふほどは俺も食ふ、）と言ひますとな、両手で一掴みにしてべる／＼と頬張りました。頬張るあとから、取つては食ひ、掴んでは食ふほどに、あなた、だん／＼腹這ひにぐにや／＼と首を伸ばして、ずる／＼と鰯の山を吸込むと、五斛、十斛、瞬間に、満ちみちた鰯が消えて、濱の小雨は貝殻をたゞいて、暗い月が砂に映つたのです。（まだあるか、）と仰向けに起きた、坊主の腹は、だぶん／＼とふくれて、鰯のやうに青く光つて、げいと、口から腥い息を吹いた。随分大膽なのが、親子とも氣絶しました。鮫鯨坊主と、唯今でも、氣味の悪い、幽霊の濱風にうはさをしますが、何の化ものとも分りません。――

と言つた場處で。――しかし、昨年――

今度の漂流物は、そんな可厭らしいものではないので。青竹の中には、何ともたとへがたない、美しい女像がありました。處が、天女のやうだとも言へば、女神の船玉様の姿だとも言ひますし、いや、ぴら／＼の簪して、翡翠の耳飾を飾つた支那の夫人の姿だとも言つて、現に見たものが其處にある筈のものを、確と取留めたことはないのでございますが、手前が申すまでもありません。所謂、流れものと云ふものには、昔から、種々の深秘な傳説がいくらもあります。それが、目の前へ、その不思議が現はれて来たものなんです。第一、竹筒ばかりではない。それがもう一重、セメン樽に封じてあつたと言へば、甚しいのは、小さな櫂が添つて、箱船に乗せてあつた、などとも申します。

何しろ、美しい像だけは事實で。―― 俗間で、濫に扱ふべきでない、尤な分別です。すぐ近間の山寺へ―― 濱方一同から預ける事にしました。が、三日も経たないのに、寺から世話人に返して来ました。預つた夜から、いまゝでに覺えない、凄じい鼠の荒れ方で、何と、晝も騒ぐ。

(困

りましたよ、これも、あなたのお話について言ふやうですが、それが皆其の像を狙ふので、人手は足りず、お守をしかねると言ふのです。猫を紙袋に入れて、ちよいとつけばニヤンと鳴かせる、山寺の和尚さんも、鼠には困つた。あと、二度までも近在の寺に頼んだが、其のいづれからも返して来ます。おなじく鼠が掛るので。處が、最初の山寺でも然うだつたと申しますが、鼠が女優の足を狙ふ。唯今でも朝顔を噛むやうだ。

皆が然う言ふのでございますがな、此が變です。足を狙ふのが、朝顔を噛むやうだ。爪さきが薄く白いと言ふのか、裳、褌、裾が、瑠璃、青、紅だのと言ふ心か、其の邊が判明いたしません。承つた處では、居士だと、牡丹のおひたしで、鼠は朝顔のさしみですかな。いや、お話がおくれましたが、端初から、あなた――美しい像は、跣足だ。跣足が痛はしい、お最惜い。と、てんでに申すんです。が、御神體は格段。お佛像は靴を召さないのが多いやうで、誰も其を怪まないのに、今度の像に限つて、おまけに、素足とも言はない、跣足が痛い。――何となく漂泊流離の境遇、落うど

の様子があつて、お最惜い。其處を鼠が荒すといふのは、女像全體にかゝる暗示の意味が、おのづから人の情に憑つたのかも知れませんが、おのづから相談して、はじめ、寄り着かれた海岸近くに、何處か思召しにかなつた場所はなからうかと、心して捜すと、いくらもありませぬ。此は陸で探るより、船で見の方が手取り早うございますよ。樹の根、巖の角、此の巖山の切崖に、然るべき室に見立られる巖穴がありました。石工が入つて、鑿で滑にして、狡鼠を防ぐには、何より、石の扉をしめて祭りました。海で拾ひ上げたのが巳の日だつた處から、巳の日様。

「――しかし辨財天の御縁日と言ふので、やがて、皆が（巳の時様。）――巳の時様、と然う言つて居るのでございます。朝に晩に、聞いて存じながら、手前はまだ拝見しません。沼津、三島へ出ますにも、此處はぐつと大廻りに成ります。出掛けるとなると、いつも用事で、忙しいものですから。」

「――御都合で、今日、御案内かた／＼、手前も拝見をしましても」

「願ふ處ですな。」

其處で、主人が呼掛けようとしたらしい運轉手は、
ふと辰さん（運轉手）の方で輪を留めた。

「何うした。」

恰も又一つ、颯と冷い隧道の口である。

「え、あの出口へ自動車が。」

「おほ然うか。え、むやみに動かし

ては危いぞ。」

「むかうで、かはしたやうです。」

隧道を、爆音を立てながら、一息に乗り越すと、
ハツとした、出る途端に、擦違ふやうに先方が入
った。

「危え、畜生！」

喚くと同時に、辰さんは、制動機を掛けた。が、
ぱら／＼と落ちかゝる巖膚の清水より、私たちは冷
汗になつた。乗違へた自動車は、さながら、蔽ひかゝ
つたやうに見えて、隧道の中へ眞暗に消えである。

主人が妙に、寂しく笑つて、

「何だか、口の尖がった、色の黒い奴が乗って居たやうですぜ。」

「隧道の中へ押立った耳が映ったやうだね。」
と記者が言った。

「辰さん。」

いま、出さうとする運轉手を呼んで、

「巳の時さん——それ、女像の寄り神を祭つたと云ふのは、もつと先方だつけね。」

「旦那、通越しました。」

「おや、はてな、獅子濱へ出る處だと思つたが。」

「いゝえ、多此の奥へ引込んだ、がけの處です。」

「あゝ、龍が、爪で珠をつかんで居ようと云ふ肝心な處だ。」
成程。」

「引返させうよ。」

「車はかはりませう。」

途中では、遙に海ぞひを小さく行く、自動車自動車が鼠ねずみの馳はしるやうに見みえて、岬みさきにかくれた。

山藤やまふぢが紫むらさきに、椿つばきが抱だいた、群青ぐんせいの巖いわの聳そびえたのに、純白じゆんぱくな石いしの扉ひらの、まだ新あたらしいのが、ひたと鎖くわされて、

緋の椿の、落ちたのではない、優しい花が幾組か祠に
供へてあつた。其の花には届くが、低いのも階子
か、然るべき壇がなくては、扉には觸れられない。
辰さんが、轟立して、巖の根を踏んで、背のびをし
た。が、けたましく叫んで、仰向けに反つて飛ん
で、手足を蛙の如く匆ねて騒いだ。

おなじく供へた一束の葉の蔭に、大な黒鼠が耳を
立て、口を尖らして居たのである。

憎い畜生かな。

石を打つは、其の扉を敲くに相同じい。まして疵
つくるおそれあるをや。

「自動車を持つ、ありたけの音を、最高度でヤツ
つけたまへ。」

と記者が云つた。

運轉手は踊躍した。もの凄まじい爆音を立てると、
さすがに驚いたやうに草が騒いだ。忽ち道を一飛び
に、鼠は海へ飛んで、赤島に向いて、碧色の波に乗
つた。

―― 馬だ 馬だ 馬だ 馬だ

遠く叫んだ、聲が響いて、小さな船は舳を煽り、

漁夫は手を舉げた。

其の泳いだ形容は、讀者の想像に任せよう。

巳の時の夫人には、後日の引見を懇請して、二人は深く禮した。

其のまゝ、沼津に向つて、車は白鱗青蛇の背を馳せた。

【完】